To　Live

にっくん♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｏ　Ｌｉｖｅ

【Ｎコード】
Ｎ６２０７Ｗ

【作者名】
にっくん♪

【あらすじ】
神奈川県にある七海高校を卒業した佐野　翔と朝倉陽乃。二人のその後を追った、時に苦しみ、時に笑い合った恋愛を記録した物語。

軌跡０００　８年間の軌跡

「……。」
私が緊張しているのが、どうやら家中に伝わってるみたい。
「緊張しすぎじゃね？」
弟があまりに緊張する私の表情を見て、苦笑いしながら言った。
そうは言われても、やっぱり緊張するものは緊張しちゃうもの。頭でわかっててても、体が追いつかない。
「そんなこと言ったって……緊張しないほうが、変だと思うわ」
「まぁまぁ。きっとリードしてくれるから大丈夫だよ。余裕で待ってれば？」
「簡単に言ってくれちゃって……。あ、ねぇ。ちょっとお水くれない？」
「はいよ」
弟は笑顔であたしにコップ１杯の水をくれた。これと一緒に緊張を飲み込んでしまおう。水を飲み込むと同時に、ノックの音。
「新郎様のご準備が整いましたので、新婦様もそろそろ、ご準備願います」
「あ、は、はい！」
「姉ちゃん、裾踏んで転ぶなよ？」
「あのねぇ……もう高校生のときとは違うの」
あたしはそう笑って立ち上がった。
「……。」
「顔、すっげぇ怖いよ。そんなで会ったら、新郎がビックリするぜ？」
まただ。うるさい弟だ、ホント。
「うるさいなぁ。アンタ、そんなうるさい子だっけ？」

「大学入って変わった」
そう言って弟はあたしの先を行く。背丈も随分伸びて、追い越されてしまった。今はもう、あたしの新郎さんより背が高く、１８０センチもある弟。いったい、父と母のどういう部分を受け継いだのだろう。
「……。」
この扉を開けば、あたしの新郎さんがいる。
ここまで来るのには、本当に時間が掛かった。
いま、振り返ろう。
あなたとの、８年間を……。

主な登場人物　―　２００９年編

＜中心人物＞

佐野（さの）　翔（かける）［２０］

＞ｉ３０８３９―１５０＜

　島根大学教育学部音楽教育専攻。兵庫県生まれ、神奈川県育ち。小学生時代から吹奏楽でアルトサックスを吹いており、現在は島根県桜田市にある『奏ウインドオーケストラ』に在籍中。快活な性格で男女問わず友人が多い。彼女でもある朝倉　陽乃とは高校１年生からの付き合い。

朝倉（あさくら）　陽乃（ひなの）［２０］

＞ｉ３０８４０―１５０＜

　島根大学法文学部社会文化学科在籍。神奈川県生まれ。高校時代から吹奏楽でトランペットを吹いており、現在は島根県桜田市にある『奏ウインドオーケストラ』に在籍中。翔同様、比較的単純な性格で男性の友人には男友達のようなノリで接されることもしばしば。彼氏でもある佐野　翔とは高校１年生からの付き合い。

＜島根大学＞

北原（きたはら）　修治（しゅうじ）［２０］

＞ｉ３０８４１―１５０＜

島根大学教育学部自然環境教育専攻。島根県生まれ。常に人のことを考えて行動する、気遣いのできる青年。翔とは基礎英語のクラスで親しくなる。

永坂（ながさか）　隆也（たかや）［２０］
＞ｉ３０８４２―１５０＜
島根大学教育学部人間生活環境教育専攻、幼児教育コース在籍。福岡県生まれ。大家族の長男で、しっかり者。

青柳（あおやぎ）　千尋（ちひろ）［２０］
＞ｉ３０８４３―１５０＜
島根大学法文学部社会文化学科在籍。広島県生まれ。陽乃とは１年生のときからの大親友で、お互いのことは包み隠さず話すことのできる仲。明るく常にリーダーシップを取る性格。

宮代（みやしろ）　奈那（なな）［２０］
＞ｉ３０８４４―１５０＜
島根大学法文学部社会文化学科在籍。福井県生まれ。一匹狼的な性格で、周りと群れることを好まない性格。陽乃と千尋とは、基礎研修で班が一緒になって以来、たまに話す程度の関係。

＜神奈川県＞

朝倉（あさくら）　夏樹（なつき）［１８］

＞ｉ３０８４８―１５０＜

神奈川県七海市立七海高校に通う陽乃の弟。吹奏楽部でアルトサックスを吹いている。

佐野（さの）　綾音（あやね）［１８］

＞ｉ３０８５１―１５０＜

神奈川県七海市立七海高校に通う綾音の妹。吹奏楽部でトランペットを吹いている。

田中（たなか）　美里（みさと）［２０］

＞ｉ３０８４９―１５０＜

陽乃の高校時代からの大親友。現在は青山学院大学に通う。

水谷（みずたに）　春樹（はるき）［２０］

＞ｉ３０８５０―１５０＜

翔の高校時代からの友人。現在は鎌倉音楽大学に通う。

長谷川（はせがわ）　海斗（かいと）［１９］

＞ｉ３０８４６―１５０＜

現在、翔の家に下宿している沖縄出身の大学生。東京海洋大学に通う。

長谷川（はせがわ）　友樹（ともき）［１２］
＞ｉ３０８４７―１５０＜
翔が長期休暇中に帰省した際、塾講師としてアルバイトする塾にいる小学生。高校時代の翔のサックスの演奏を聞いたことがある。海斗とは血縁関係はない。

西山（にしやま）　絢奈（あやな）［１７］
＞ｉ３０８４５―１５０＜
陽乃が長期休暇に帰省した際、家庭教師をしている先の教え子。翔と陽乃の話を聞くのが大好き。

軌跡００１　２００９年、春

「遅いなぁ……何やってんだろ。早くしないとオリエンテーリング遅れちゃう！」
あたし、朝倉（あさくら）　陽乃（ひなの）は２００９年の４月しょっぱなから、かなり焦っています。というのも、待ち合わせをしているアイツが来ないから。
あまりに遅いから、携帯電話でさっきから何度も呼び出ししてるけど、お留守番伝言サービスにすぐ繋がっちゃう。バカにしてんの？
「ゴメーン、マジでゴメン！」
通りの向こうから、バカヅラしたアイツがやって来る。
「何やってんのよ！　ほら、もう行くよ！　走って走って！」
あたしはヘラヘラ笑いながらやって来たあたしの彼氏――佐野（さの）翔（かける）のお尻を叩きながら急いで走り出した。今日は新学期の始まり。各学部でオリエンテーリングがある。あたしが在籍するのは法文学部。それに対し、翔は教育学部。もちろん、学部が違うのでオリエンテーリングも違う場所であるんだけど、翔と来たら。
「新学期一番にお前の顔見ときたいねーん」
だって。バッカみたい。
とかなんとか言いながら、あたしもついつい会いたくて、こうして待ち合わせして。そして只今絶賛後悔中。なんで４月の朝から息切らせて走らなきゃなんないのよ！
「だいたい、あたしのほうが学部棟遠いんだからね！　遅刻したらアンタのせい！」
「悪かったって！　昼飯おごるから、許したって！」
ホントに悪気あんのかなぁ、コイツ。
あ。電話だ。
電話に出るなり、島根大学でできたあたしの大親友・青柳（あおやぎ）　千尋（ちひろ）

が甲高い声を上げた。
「ひーなのー！　ヤバい、ヤバい！　教授もうすぐ来るよー！　今日、鬼ダヌキだよ！」
そう言って慌ててる千尋。もちろん、あたしのほうが焦る。
「きゃー！　もうヤバい！　バカケル！　今日は一番高い定食だからね！」
「へいへい！　わかってるて！　ほなまた昼なぁ！」
あたしは翔がそういうのをもう聞き流しながら、必死で学部棟に走った。

それにしてもやかましいヤツなぁ。別に初日のオリエンテーリング遅れたところで単位落とされるわけでもないのに、何をそないに慌ててるんや。
オリエンテーリングの部屋に行く。まだ教授は……ほらな。来てへんやろ？　何も慌てることなんて全然ないのに。
「おはよー！」
いつもどおりのテンションで講義室に入る。
「おっ、社長登校かよ！」
「うるさいわ！　間に合ったから問題ございませーん！」
オレは同期の茶化しを適当に交わしていつも絡んでるヤツらのとこへ行った。
「おはよ！　相変わらずだな」
コイツは北原（きたはら）　修治（しゅうじ）。入学してすぐの基礎英語のクラスで一緒になって、学部まで同じってわかったからすぐ意気投合。
「翔が一番に来たりしたら、４月でも台風来るぜ、マジ」
修治の隣で意地悪く笑っているのは、同じ学部の永坂（ながさか）　隆也（たかや）。コイツとは基礎研修で一緒になった。
「うるさいなぁ～。いいの。オレは何があってもマイペース！　そ

う決めてるんや」
「それに巻き込まれる朝倉さんは可哀想になぁ」
修治が呆れた様子でため息を漏らした。
「どこがカワイソーやねん！　アイツキーキーほんまうるさいからなぁ。たまらんヤツやで！」
「おっ。どうするよ、タカ。コイツこんなこと言ってやがる」
「しょーがねーな。ムービー撮って送るか！」
「ちょお待てや！　お前、陽乃のメアド知っとんか！？」
「ハハハ！　焦ってる、焦ってる！　知るわけねーじゃん！　学部一緒じゃねーから絡みねぇのに！」
そう言って笑う二人。コイツらとはいっつも、こういうノリや。
騒いでるウチに、教授が来た。あーあ。ダルいオリエンテーリングの始まり、始まり～。
「えー……オリエンテーリング開始前に、残念な話をしなければならない」
「……？」
珍しくテンションの低い話から始めるねんな。新学期なんやし、明るめで行ってほしいんですけど。
「君たちには学内だけで使用できるメールアドレスを入学と同時に付与しているな」
オレたちの島根大学だけやなくって、最近どこの大学でも学生一人ひとりにメールアドレスを付与してる。これで履修登録をしたり、提出物を提出したりする。その話やろな。
「そのメールアドレスを悪用して……まぁ、いわゆるチェーンメールのようなものを配信している者がいるようだ」
そんなんおるんかい。どこにでもアホはおるもんや。
「特に、ＵＲＬが添付されていてな。それをクリックすると、特定の人物を誹謗中傷するような内容の書き込みがされている掲示板などに飛ぶことがあるそうだ。今後、大学としてはＵＲＬが書き込まれたメールは送信できないようにするなどの措置を取る予定だが、

学生諸君もこういったメールなどが届いたら安易に開かず、破棄するようにしていただきたい」
はぁ～……便利になったらなったで、メンドくさいことが起こるもんですね。
メールが届いたのか、ブーブーオレのポケットが震えた。
「なんやアイツ。オリエンテーリング中にメールしとったら鬼ダヌキにしばかれんのちゃうんかい」
オレはククッと笑いながらメールを開いた。

今日の放課後、空いてる？

「おっ。デートか？」

バカ。大事な用事できたの。付き合ってほしい。

「……珍しい。真剣（マジ）なんやな。いいよっと」

今日はヒマやし、別に構わんわ。

バサバサッ！と窓の外で大きい音がした。鳥が飛んでいったみたい。
「……。」
４月やのにまだちょっと寒さの残る、そんな新学期初日。オレたちはいつもどおりの日々をこれからも過ごす……ハズやった。
このオリエンテーリングで聞いた話をキッカケに少しずつ、歯車が狂うとも知らずに。

軌跡００２　禁断の出逢い

「え？　なんて？」
オレは陽乃の言葉に耳を疑った。
「だから。例のオリエンテーションで言われたチェンメで……こう、誹謗中傷受けたの、あたしの友達なの」
ホンマかいな。
いや、陽乃がウソ言うてるとかそんな風に思ったわけちゃうんやけど。なんていうか、ほら。こういう事件っぽいのんて、自分の日常生活とはちょっと離れた、ドラマとか映画みたいな世界の話っていう感じがするねんな。
だから、こうして急にこういうこと言われても……なんて反応してええぇか全然わからへん。
「で？　その子の名前は？」
隆也が聞く。
「宮代（みやしろ）　奈那（なな）ちゃん。文学部の社会文化学科の子なの」
「へぇ～。美人？」
おいおい。修治はすぐそうやって違う路線へ走るねんから。けど、陽乃ももう修治の性格をわかってるのか、さらりと答える。
「そうだなー。まぁ、友達のあたしが言うとヒイキっぽいかもしんないけど、うん。美人だとは思うよ」
「よっしゃー！　きたぜ、きたぜ隆也！」
ほら、もう。アカンって。修治、軽いノリやねんから。
「あー、でもあれだな。ちょっとキツい感じかも」
「性格が？　ドＳとか？」
修治が一瞬で表情を変える。
「そうだなぁ。性格キツいっていうより、なんていうか……女の子

らしからぬ表現になるかもしれないけど、一匹狼っていうの？　群れないタイプ。個人主義なのよね、彼女」
へー。今時そんな大学生女子おるねんな。オレなんか一人とか無理やわ。寂しすぎる。こうやってみんなでワイワイやったほうが、絶対楽しい。
「それがなんで彼女がそういう……誹謗中傷っぽいの受けるようになったんだ？」
隆也がもっともな質問をぶつけた。すると、陽乃の親友で奈那や陽乃と同じ学科の青柳（あおやぎ）　千尋（ちひろ）が答える。
「結局、その個人主義っていうのが……そのメールを配信した人ね。その人に相容れなかったんじゃないかな」
「ふーん……。だけど、そんな幼稚なことする人、未だにいるんだな。大学生にもなって」
オレが思ったのと同じことを修治は考えてたみたい。オレも同じ意見。なんで２０歳にもなってそんなことできるんだか。よぉわからん。
大学を出て１５分ほど歩くと、その宮代さんの住んでる単身者用マンションに着いた。オレの住んでるマンションとよぉ似た造り。
陽乃がインターフォンを鳴らして「奈那ちゃーん！」と元気良く彼女の名前を呼んだ。しばらく応答がなかったけど、静かにドアが開いた。
「陽乃ちゃん……」
「どう？　体調、少しは良くなった？」
「うん。おかげさまで……あ」
陽乃の後ろにオレ、隆也、修治の姿を確認すると、一気にその表情が険しくなった。これにはオレらもさすがに引いてしまう。
「……陽乃ちゃん。後ろの人たちは？」
「あ、この人たちね。あたしの……えっと。ほら、翔！」
あぁ、あぁ、うん。自己紹介やな。第一印象、大事やで。
「えっと。宮代さんですよね？」

「……はい」
全然警戒心解けへん。アカン。ここで嫌な人レッテル勝手に貼られたら、やっぱ今後会うかもしれへん人やから、ヤバいよな。
とりあえず、オレは満面の笑みでこう言うた。
「島根大学教育学部音楽教育専攻の、佐野　翔です。一応、この陽乃の彼氏やってます」
「……。」
表情が少しだけ緩んだ。気がしたのはオレだけ？　陽乃も誰も気づいてない。
「一応って何よ、一応って。はい、じゃあ次は？」
修治が苦笑いしながらオレの横に立つ。
「初めまして」
あ。しもた。オレ初めまして言うん忘れた。
「佐野と同じ学部で、自然環境教育専攻してます、北原　修治です」
「どうも……」
うーん……。やっぱり、さっきのオレに向けた表情と違う気がするんやけど。オレの気のせい？
「じゃ、次ね」
「はいっ！　えーっと、永坂　隆也です！　佐野と北原と同じ学部で、人間生活環境教育専攻、幼児教育コース在籍してます！　よろしくね、宮代さん！」
「どうも……」
うわぁ……。いくら一匹狼でも、こりゃ愛想なさすぎやろ……。
「どう？　ちょっとは体調、良くなったかな」
「うん……まぁ、まだちょっと学校行く気になるまでは時間かかりそうだけど」
「そっかぁ……それは仕方ないよね」
陽乃と青柳さんが寂しそうな様子を見せる。
「ありがとね。私、結構引きずっちゃうタイプだし……」
うーん。でもさ……このまま引きこもってたらなんていうか、ア

カン気がするな。よし！　ここはちょっとオレの出番やな！
「なーなー！　宮代さん！」
「は、はい」
おっ。ちょっと反応がいい感じ？
「ほなな、引きずらんように、ちょっとパーッと気分変えに行かん！？」
「ちょ、ちょっと翔」
陽乃が困ってるけど、オレはそんなウジウジしたんは嫌いやからな。
「どないやろ？　今度の休み、このメンツで出かけへん！？」
「……。」
あれ？　もしかして滑った？
「……いいよ」
陽乃と青柳さんの表情が今まで見た中で一番驚いた表情になった。
「行こう」
よっしゃ！
「ほな、今から計画練らん！？　どないや、陽乃。みんなも」
「あ、あたしはいいけど。千尋、いける？」
「うん。私も今日はヒマだし」
よっしゃよっしゃ！　えぇ感じ！
「なぁ、タカとシュウはどないや？」
「俺は大丈夫。シュウは？」
「しょうがねぇな。翔の頼みなら、聞いてやるよ」
よっしゃー！　ほな、決まりやな。
オレはテンションを上げながらすぐに計画を練ることを提案した。
「だけど、場所はどうするの？　どっかファミレスでも行く？」
「せやなぁ」
そのときやった。宮代さんが言うた。
「私の家でいいんじゃない？　何もわざわざここから動かなくても……いいと思う」

おお！
「せやな！　お願いできる！？」
「いいよ。ちょっと片付けるから、待っててね」
そう言うて宮代さんはいったん家の中に戻った。
「ありがと、翔」
陽乃が呟いた。
「なんで急にお礼？」
オレは笑って陽乃に聞き返す。
「こういうときは……翔ぐらい、少し強引なくらいがいいんだなって思って。すっごい助かった」
「へへ。オレはお前のためならどんなことでもするで！」
けど。

いま、思えば。

これだけはやめとけばよかった。

オレが踏み込むべき問題じゃなかった気がする。

もう。

遅いけど。

軌跡００３　過去をひらく

へー。

女の子の部屋に入るのは初めてやないけど。この宮代さんって子の部屋は陽乃の高校の頃の部屋とも、今の部屋とも、綾音の部屋とも違う感じやな。個性が出るなぁ、部屋ってやっぱり。

陽乃は淡い水色とかが好きやから、涼しげな色。綾音は桃色が好きやから、そういうのを基調にしてる。でも、どぎついピンクじゃなくて、日本に昔からある桃色。そういう色。それに対し、この宮代さんは無機質って言うたら語弊があるけど、黒と白を基調にした、やっぱりオレにしてみたらちょっと無機質な色で部屋が構成されてた。

本棚に目をやる。

几帳面というか、むしろ神経質にも見えるほどにキッチリと本が並べられている。ちょっとでもズラしたりしたら、怒られそうな感じ。

っていうか、アレやな。初めて入った女の子の部屋を詮索するみたいなこと、やめたほうがいいかな。

「どうぞ」

うわ！　ビックリした。おぉ……バレてへんよな。怒られそうな感じやったからビックリしたわぁ。

「おおきに。いただきます」

へー。気が利くなぁ。なんていうか、ちょっと暖かいっていうかちょっと暑い感じもしてたから、こういう冷たいお茶、ちょうど欲しかってんな。

そうはいうものの、やっぱり几帳面に整理された部屋は気になってしまう。キョロキョロと辺りを見渡しても、陽乃や隆也たちは気づいてない。

……。
あれ？
見たことある……気がする。何やろ。デジャヴってヤツか？
オレはとりあえずお茶を飲んでから、本棚に目をやる。どうしても気になる。
「ねぇねぇ、奈那ちゃん！」
陽乃の声がいやに響く。宮代さんと陽乃は何かを話してから、オレらに言うた。
「翔。ちょっとお茶菓子欲しくなっちゃったから、奈那ちゃんと買ってくるね」
「おう。了解」
そういうとバッグを抱えて陽乃と宮代さんは出て行った。
え。
っていうか、女子の家に野郎3人置いていきます？　ビックリ。
でも隆也も修治も特に気にしてないみたい。
「はいよ？」
突然、隆也の声がした。電話か。
「あー！　やべ！　そうだった！　悪い、すぐ行く！」
電話を切るなり、隆也が言う。
「ゴメン！　俺、今日ゼミ友達と調査に行くのうっかり忘れてた！
宮代さんと朝倉さんに言っといてくんね？」
「なんやお前！　忘れっぽいなぁ。オッケ、言うとくわ」
隆也は挨拶もソコソコに、慌てて家を出て行った。っていうかお前の家ちゃうのにまるで自分の家みたいにバタバタ走って出て行くなぁ……。
「なぁ」
修治が突然声を上げた。
「ん？」
「女子の家のトイレって……借りてええかなぁ」
は？　突然何を恥らってんねん、コイツ。

「いやぁ……オレなら使わん」
マジでね。初対面やし。
「だよなぁ……。うん！　しょうがねぇ！　大学行ってトイレ行ってくる！」
はぁ！？　マジで言うてんの！？
あ……お～い……。
行ってしもた。
……。
あれ？
オレ、女子の部屋に一人ですか？　どうすんの、この空気。
……。
さっきの本棚。気になる本がある。
あの色。
オレはそっとその本を手に取った。
それはやっぱり、本じゃなかった。アルバムやった。そのアルバムの表紙には……。
「兵庫県西宮市仁川北小学校……卒業アルバム……」
手が震える。これは……。
1ページ目。卒業生が立ってる。2ページ目。先生の紹介。3ページ目。6年1組……。オレはそのページを隅から隅まで見る。
おった……。
大中　一志という名前があった。
「ケホッ……ゴホッ！　ゴホッ！」
アカン。落ち着け。大丈夫や。
それより、わからへんのがこのアルバムや。なんでこのアルバムを……宮代さんが持ってるんや？　それがわからへん。
次のページを捲る。
やっぱり、このとき――亡くなった人っていうのは多かったみたいやな。
このときっていうのは――1995年1月17日に起きた兵庫県

南部地震、いわゆる阪神淡路大震災のこと。オレも、被災者。被災者っていうか……オレ以外の家族が、全員……おらへんなった。
大中　一志は、オレと血の繋がった兄貴。
「あああああああああ！」
オレは発作的に大声を上げて、そのアルバムを放り投げてしもた。バンッ！と大きい音を立ててアルバムは壁にぶつかり、床に転げ落ちる。
「ハァ……ハァ……！」
落ち着け。落ち着け。冷静になれ。
「……。」
なんでこのアルバムが、宮代さん家にあるんや。
落ち着け落ち着け。とにかく、放り投げたアルバムは元へ戻そう。
無造作に放り投げたアルバム。開かれたページにも、兄貴と同じようにページの端に写っている人がふたり。女子と、男子。
こういう写真が、この年は多かったって聞いてるけど、マジなんやな。
「高橋　未実さんと鴫野　周吾さんか……」
オレはその写真のふたりの名前を呟いてから、卒業アルバムを戻す。間一髪。本棚に戻したところで、陽乃と宮代さんが戻ってきた。
「え？　卒業アルバムが？」
「うん……」
オレは陽乃にふたりがおらへんかった間に見たことを伝えた。
「なんで？　だって……翔のお兄さんって……西宮でしょ？　兵庫県の？」
「せやねん。やから、オレもわけわからへんくて……」
陽乃も困ってる。そりゃそうやろう。急に宮代さん家に兄貴のアルバムがあるとか、そんなこと言われても。
「なんで……持ってるのって、聞けば？」
「聞く勇気が……持たれへん」

陽乃がわざとらしく笑う。
「そ、それはちょっとさぁ、考えすぎよ！　ほら、偶然なんていうか……」
陽乃も言葉に詰まる。
「うん……。聞いてみんと、わからへんよな」
大丈夫。なんてことない。明日、聞いてみよう。そうすれば……
きっとアルバムのことだってスッキリする。

大丈夫。

だいじょうぶ……。

軌跡００４　彼女を連れ出そう！

「翔？」
ふと気づくと、陽乃が隣に座ってた。
「おぉ……おはよ」
「大丈夫？」
この場合の彼女の言う「大丈夫？」とは、昨日のことを含んでるんやろう。オレは正直、ちょっと参ってたけど彼女を心配させるわけにはいかへん。やから、ちょっと無理やり笑顔を作ってこう言うた。
「大丈夫や。ちょっと考えすぎたしな」
「それならよかった」
彼女の笑顔を見れるだけで、オレはもう笑顔になれる。この笑顔を守るためなら、オレはマジで何でもできると思う。
「でも、どうするの？　奈那ちゃんに……アルバムのこと聞くの？」
オレは首を左右に振った。
「やめとく。あの人、まだちょっと不安定なんやろ？　そこへなんかこう、心配の種を増やすような、疑問を抱かせるようなこと言いたくないし」
「……ありがと。なんかゴメンね、あたしがあんなこと言っちゃったばかりに翔にも変な気ぃ遣わせちゃって」
「それは全然構わへんよ。それよか、どうするよ。やっぱり宮代さん……元気ないし」
「それなんだけど」
突然後ろから声がしたので振り返ると、隆也がいた。
「おぉ、隆也。おはよ」
「おはよーさん。お二人さん、朝からラブラブで羨ましいこと」

隆也はニコニコ笑いながらそう言った。
「へへへ。まぁそれはいいとして。話の続きは？」
「ちょっとさ、俺たちで旅行とか行かない？」
「旅行？　いつ」
陽乃が驚いて聞き返す。
「今度の土日」
「そんな急に……どこ行くねん」
オレはビックリして同じように聞き返してしもた。そんな急に旅行や言われても、宿泊先とかどないするんやって話で。
「近くだよ、近く。全然問題ない。なっ、修治？」
いつの間にか修治が隆也の隣におった。
「問題ないよ」
修治が説明する。まず、旅行先は主に島根県内。仁摩サンドミュージアムやったり、松江市内やったり。宿泊先は修治の実家でもある旅館。修治の友人やからってことで、はじめは無料になるとか言われたけど、曲がりなりにもバイトしてる学生やから、そこは甘えすぎにならんようにしとく。結果、通常の料金の半額支払うことに。
「せやけど、ちょっと待って。オレやろ、隆也に修治、陽乃。ほんで宮代さんやけど、宮代さんに言うたん？」
「それがまだ」
修治が笑う。
「なんでメインがまだやねん……。ちゃんとそこ確認取っとかんとやな」
「大丈夫よ！」
今度は前から声がしたから見ると、青柳さんがおった。ほんで、隣には宮代さん。
「私がいま、奈那ちゃんに直接確認したから。奈那ちゃんも行きたいって。ねっ、奈那ちゃん」
宮代さんが小さくうなずく。そのときやった。
「……！？」

めちゃくちゃ冷めた目で見られた。
気のせい？
周りにはオレ以外に隆也、修治、陽乃がおる。４人のうちの誰に向けられた視線かは、わからへん。オレにとは限らへんやんか。
もう１回見てみる。間違いない。この視線は確実にオレを射抜いてる……。
「佐野くん？」
青柳さんの声にハッとオレは我に帰る。
「どうしたの？　ボッとして……」
「い、いや……なんでもないよ」
「そうそう。翔、最近たまにこうしてボーッとしてることもあるからさ。気にしなくていいと思うよ？」
「やかましわ！　お前～、付き合い長いからっていらんことまで言わんでえぇぞ！」
オレと陽乃は冗談っぽく頬を引っ張り合いながらいつもの調子で言い合いをした。よしよし。これでいい。いつもの、オレらしく……。

ちょっとは気づいてるみたい。
あのアルバムの違和感に。
けど、私にしてみればあのアルバムを持っていることに何ら違和感はない。この人にしてみれば気味が悪いだろうけど、ね。
それにしても、あの人は役立つなぁ。私が思うように動いてくれる。きっと、私に好意がある。悪いけど……利用させてね。
どんどん、動いてね。
……。
このままで済むなんて思ってたら、大間違いなんだから。

偽善者じゃないの。ちょっと容姿が良くて、人気があるからって……。そんなの、誰も知らない過去が露呈した途端、ひっくり返ってしまうんだから。

知らないなんかで済まされない。

嫌でも思い出させてあげるんだから……。

軌跡００５　仁摩サンドミュージアム

「ほぇ～……！」
隆也や青柳さんたちの半ば無理やりな旅行計画が発表されてから間もない土曜日。オレたちは結局、旅行にこうして来ていた。
いま、オレたちがおるのは仁摩サンドミュージアム。ドラマと映画になった『砂時計』でも重要な場所になったこのサンドミュージアム。オレたちはメインシンボルの一年計砂時計「砂暦」の真下におる。
「これが1年かぁ……」
陽乃が感慨深そうに呟いた。
「オレらって……いま２０歳やから、この砂暦は２０回砂を落とし続けたことになるんやなぁ」
「そう考えると……人生って、長いよなぁ」
修治は遠い目をしながら言った。今は人生８０年やっけ？　オレらは……あと６０回はこの砂時計をひっくり返す計算になるんやな。
「……いるけどね」
「え？　なんて？　奈那ちゃん」
青柳さんが反応する。宮代さんはすぐに笑顔で「ううん。独り言」と答えた。
「そう？　あっ。ねぇねぇ、あっちにお土産コーナーっぽいのがあるよ！　行こう！」
「え！　行きたい、行きたい！　ねぇ、奈那ちゃんも行こう！」
そう言うと女子3人は小走りでお土産コーナーのような場所へと向かって行った。
「おい、翔」
修治がツンツンとオレのわき腹をつついてきた。

「なんや？」
「青柳さんって……誰かと付き合ってんのか？」
「え？　青柳さん？　さぁ……オレ、よぉ知らん」
「そっかぁ……」
え？　何？　もしかして……。
「修治。お前、青柳さんのこと好きなん？」
「バッ、バカ！　お前こんな狭い響くトコでそんなでけぇ声で言うんじゃねーよ！」
オレの声は小さい頃からデカい。こんな狭い場所で、よく響く場所でオレが喋ろうものならあからさまに皆に聞こえてしまう。オレは普通に喋ってるつもりやのに、声がデカいってすぐに言われてまう。
声がデカいのも一長一短やなぁ。
「好きなら好きってさっさと告ればいいのに」
「んだよ。俺はお前ほど肝が据わってねぇの。慎重派なんだよ」
オレは思わず大笑いしてしもた。
「バカ！　笑うトコじゃねーよ！」
「いやいや、だって修治が慎重派て……ウケんねんけど！」
おもろすぎる！　慎重派なんて、修治に一番似合わん言葉や！
「そーいえばさぁ」
隆也が割り込んできた。
「翔と朝倉さんって、いつから付き合ってんの？」
「えぇ～？　どないしたん、急に」
「だって、そういう話、翔全然してくれないじゃん。俺、気になるんだよな」
修治も興味津々みたい。
「俺も聞いてみたい！」
しょうがないなぁ……。
「別にアレやで？　ありふれた話や。オレが陽乃に告ってん。高……1やったかな。うん。高1の6月くらいやった。オレが告白して。

ほんで1回フラれた」
「えー！？」
隆也と修治の大声がこだまする。
「お前、1回フラ……！」
「アホ！　声でかいわ！」
オレは慌てて修治の口を塞ぐ。幸い、陽乃たちはお土産買うのに夢中で気づいてない。
「そうですよ、そうです！　オレは1回陽乃にフラれました！」
「へー！　知らなかった。なんで？　なんでフラれたんだよ」
なんでこんな話になってるんや……。でも、適当に話交わそうとしてもコイツらは絶対納得せぇへん。しゃあないな……別に構わんか。
「なんていうか、アイツがオレと付き合えるほど釣り合ってないの、あたし、みたいなこと言うて断られた」
それを言うと修治が「へー！　すごい謙遜じゃん」と驚いた顔をする。その後の発言に今度はオレが驚かされた。
「俺、彼女にするなら朝倉さんみたいな子がいいなー」
は！？
「ちょ、お前それ本気で言うとん？」
修治が意地悪く笑う。
「ハハハ！　冗談、冗談！　本気にすんなって。顔怖ぇよお前！」
ウッ……。だってなぁ。高校のときも陽乃狙いのヤツ、結構おって危険やったし。こんなこと言うて、修治も案外本気かもしれへんし。気をつけるに越したことはないな。
「冗談ならえぇけどな。それにお前、さっき青柳さんの話しとったばっかやのに、尻軽いヤツやな」
「それとこれとは別です～」
何がどう別なんか、教えていただきたいところ。
「なぁなぁ、隆也は好きなヤツとかいねーの？」
修治はこういう話題、つまり恋愛トークが結構好きみたいで、な

んか暇ができたら誰彼問わずにこういう話を振ってる。
「別に俺はいないよ。いれば、相談くらいしてるって……」
少し戸惑う隆也。
「ホントかなぁ。隆也、肝心な部分はうまく隠すトコあるからな」
それはオレも思う。隆也って、本音をあんまり言うタイプじゃない。
「俺たちでよけりゃ、相談乗るからな！」
そう言って修治は隆也の肩をバシバシ叩く。隆也は少し迷惑そうな顔をしてるようにも見えた。

相談、ねぇ。
乗ってくれるのは嬉しいんだけど、今回のことに関しては修治にも翔にも相談できそうにない。
何しろ……俺がいま、好意を抱いてるのは他でもない彼女（あさくら）だ。
さっきの翔の顔を見たとき、ビックリするくらい怖かった。なんていうか、ホント横取りされてたまるかよ、みたいな顔。
だけど、俺だって黙っているだけじゃない。いろいろと考えてる。なので、今回の旅行も実は、その根回しみたいなものだ。
俺が一人で動いてるわけじゃない。もう一人、強力な仲間がいる。その仲間は、いまお土産屋さんでお土産物を俺が好意を抱いている人と一緒に買っている。
言われたのは、ついこの間だ。
「私……佐野くんのこと、実は……」
その先は言わなかった彼女。だけど、それが何を意味するかはわかる。
「だけど……佐野くん、朝倉さんがいるし……」
そう俯く彼女はとても綺麗だった。それを見ていると、とても黙ってはいられなくなった。
「俺も」

びっくりするくらい、言葉が素直に出た。
「俺も協力するよ！」
「でも……」
「俺は朝倉さんのことが好きなんだ……」
言ってしまった。これはすなわち――彼女は翔のことを朝倉さんから奪いたい、俺は朝倉さんのことを翔から奪いたい――ということを意味していた。
「ありがとう。嬉しい」
そう彼女はやわらかく笑って答えた。
そして今回の旅行。彼女はできるだけ、翔に近づき、できることなら惑わすくらいのつもりでいる、というかなりの気合いの入りようだった。
俺もそのつもりでいた。だけど、翔と朝倉さんを見ていると、ふたりの間には尋常ではない堅い絆と、それ以上に恐ろしく感じるまでの愛情があった。

――ちょ、お前それ本気で言うとん？

修治の言葉に反応した時の、翔の声のトーン。あれは明らかに修治を敵対視しているような雰囲気だった。
俺はどうだろうか。本気で翔と対立するとなったとき、アイツと面と向かって勝負できるだろうか。
不安は不安だったけど、俺だって朝倉さんを好きだっていう気持ちは負けてない。
俺には俺にできることをする。ただ、それだけだ。

軌跡００６　静かな火花

午後６時前。オレたちはあちこちを観光して、やっとこさ修治の実家の旅館に着いた。もっとなんかこう、ボロい感じかと思いきや、思いのほか修治の実家の旅館っていうのは綺麗やった。

「それじゃ、部屋は男子と女子で別々ね！」

青柳さんが張り切って仕切る。男女別々かぁ……。そりゃま、そうやろな。この中で付き合ってるメンツ言うたら、オレと陽乃だけやし。ちょっと不満はあるけど、しゃあないか。

そんなこと考えてたら、青柳さんがニヤニヤ笑いながらこっちを見てきた。

「な、何？」

「佐野くん、いま陽ちゃんと一緒の部屋がよかったなぁ～とか考えてたでしょ？」

なっ……。

「そ、そんなことないって！　嫌やなぁ、青柳さん。すぐ何でもオレと陽乃をくっつけたがるねんから！」

「そうだよ！　あたしだって、別にそんなこと言ってないし！　もう！　千尋はすぐにそうやって翔とあたしをくっつけようとするんだから」

陽乃もプリプリしてる。そりゃあ無理もないやろう。すぐにこうやって一緒にしようなんて、されたほうはたまったもんじゃない。

「とにかく！　もう疲れたし、食事しようや！　修治、ご飯いける？」

「ちょっと待って。いま聞いてくるよ。もしかしたら、風呂先になるかもしれねぇけど、大丈夫？」

それは全然問題ない。女子も、隆也もＯＫって返事した。

修治が戻ってくるまで、割り当てられた部屋で荷物の片付けとかをすることに。まぁ、いうてもそんなに時間はかからへんやろう。
しかし疲れたなぁ。ま、なんであれ今日と明日は結構楽しめる。講義とかレポートのことは忘れて（普段から忘れてるけど）、目いっぱい遊ぼう。
「なぁ」
急にやった。隆也が言うた。
「んー？」
「翔と朝倉さんって、付き合い長い？」
おっ。なんや、どないしたんや急に。
「どないしたん？　急に」
「いや、なんか気になってさ」
へぇ～。恋愛とかに興味なさそうな隆也が珍しいな。陽乃との出会いは、実は古い。もちろん、お互いに記憶はないけれど、実は12歳のときに彼女の母の実家がある石川県で会っていた。オレは家族旅行で石川県に来ていて、暇やったから川沿いを歩いてたら、陽乃たちを見つけたから仲間に入れてもらったっていう経緯がある。
もちろん、高校入学時はそんなこと全然知らんかったけど、偶然オレの家にある写真と陽乃の家にある写真が同じやったから、そこから小6のときに会ってたっていうことがわかった。やから、出会いといえば小6のとき。付き合いは、といえば高1のときからになる。
「へぇ！　長いんだ、かなり」
「長い言うても、せいぜい今で5年。中学から部活して、高校まで一緒になった子なんか後輩にぎょうさんおるから、その子らなんかもう6年やで？　それに比べたら、まだまだ。小学校卒業にも至ってへんねんから」
そう考えてみれば、まだまだオレたちって先は長いなぁ。
「そうは言っても、お前と朝倉さんの絆って、そう簡単に切れそうにないよな。めちゃくちゃ強そう」

「そうかぁ？　そうは言うても、何回もケンカとかしてるし……。まぁ、こんなこと言うたら陽乃にシバかれるかもしれへんけど、人間どないなるかわからへんしなぁ」
「……まぁ、そうかもしんないけど、な」
隆也の声のトーンが少し落ちた。
「おいお前！　そこはもうちょっとこう、心配ねーよお前らならとか言うとこやろ！」
オレは笑いながら軽く隆也の首を絞めにかかった。
「ぐぇ～！　や、やめろってマジで！　悪かった、訂正する訂正～！」
ドタバタ暴れてるうちに修治が戻ってきて「お前ら人ん家の旅館で暴れすぎ！」と怒鳴られてしまった。
「もの凄い音してたけど、何やってたの？」
食堂に行くと、ご飯をよそってる陽乃に笑いながらそう言われた。
「隆也がいらんこと言いよるから、オレが制裁しとってん」
「制裁～？　翔、やめなよ。アンタ意外と腕力強いんだから、永坂くんみたいな草食系男子、すぐに悲鳴あげちゃうじゃん」
隆也は嬉しそうに笑いながら「そうだろ？　もっと言ってやって！」とか言うてる。なんやコイツ。陽乃の前にいったらエラい機嫌えぇし。
まさかコイツ……。
アカン。友達を疑うのはよぉないで。
「やかましわ！　お前を肉食系にしたるために、鍛えたってるねん！」
「よく言うよ！」
修治が大笑いする。
「はいはいはーい！　大騒ぎはそこまで！　お肉が来ましたよ～」
「おぉー！」
オレたち男子3人は肉っていう言葉に真っ先に反応。すぐに椅子に座って食事が並ぶのを待つ。

「じゃあ女の子たちも座って、座って！」
修治のお母さんがそう促して、陽乃たちも席に着く。オレの前には陽乃……じゃなくて。
「……。」
「おう！」
宮代さん。
「おっ？　女子勢どういう風の吹き回し？　なんか、新鮮やなぁ！」
陽乃は隆也の前。ほんで、宮代さんがオレの前。ほんで……。あぁ、なるほど？　修治と青柳さんのためか。
オレはニヤニヤ笑いながら笑いをかみ殺す。修治は真っ赤になってた。
食事も進み、３０分ほど経ったときやった。
「ねぇ」
宮代さんが不意に言うた。
「んー？」
「私と佐野くん……どこかで、会ったことない？」
え？　オレと宮代さんが？
「え？　あったっけ？」
んー？　いつやろ……。
「いつ頃？」
「そんな前ではないんだけど」
えー？　でも大学入る前やろ？　オレは高１から七海におるから、出身が福井県っていう宮代さんと会うはずはない。うーん……。
「ゴメン。覚えてへんわ」
「……そっか。私も記憶が曖昧だし、勘違いかも」
そう言うて、宮代さんは味噌汁をすすった。なんとなく、違和感があったけどオレもすぐにそう思い込んで、話をスルーした。
「熱っ！」
オレもすすった味噌汁は、思いのほか熱かった。

軌跡００７　その輝きが忌々しい

そっかぁ……。覚えてないか。無理もないわよね。ほんの１０分程度の出会いだったし。でも私は覚えてる。あれは高３のときのこと。

私は当時、南大阪に住んでいた。そして、吹奏楽部に入っていた。担当楽器はフルート。もちろん、あの当時の私もこんなところで彼に遭遇するとは思ってもみなかった。

ホール練習があったあの日。ギリギリのところで同級生たちと乗り込んだバスの中に、彼はいた。今でもあの日のことはありありと思い出される。

どうやら私が入っていた吹奏楽部の部長と、副部長が彼の中学時代の友人だったみたい。彼と懐かしそうに話をするうちに、私も彼のことが少し気になった。だけど、その印象は次の日、一瞬で変わってしまった。

私は……福井県出身だけれども、小さい頃は兵庫県の西宮市に住んでいた。そのことはもちろん、当時の部活友達や彼も知っている。だけれども、ひとつだけ私はその話になったとき、ウソをついた。

あの時のやり取りが鮮明に思い出される。

「西宮のどのあたりだったの？」
「え？」
「私も……兵庫県にいた頃、西宮に住んでたから」
「へー！　仁川、仁川のほう！」
「そうなんだ……」
「宮代さんは！？」
「私は夙川（しゅくがわ）のほう」

「そうかぁ。ちょっと離れてるねんな！」

ウソだ。私も当時、仁川に住んでいた。なんでそんなウソをついたかって？　心当たりがあったから。

私の家を……めちゃくちゃにしたアイツに。

さらに私は気になって、好意を持ったフリをして同級生たちに聞いた。彼の昔のことなどを。あっさりと彼らは私にいろいろと話をしてくれた。そしてどんどん確信していった。間違いなく、彼は……。

そして極めつけは次の日。半信半疑で行ったあの場所に、彼はいた。そして、その目の前にあるものにはしっかりと、証拠となる文字が刻まれていた。

思い出しただけで忌々しい。全部が憎く見える。彼の喋り方も、姿形も、笑顔ですらも。

「宮代さん？」

ハッと我に帰る。そうだ。いま私は、永坂くんと旅館の少し南にある小高い公園に来ていた。

「どうしたんだよ。急に話って」

「うん……。実はね、佐野くんのことを、もっと教えてほしいなぁって思って」

「え？　翔のこと？」

「そう。やっぱり、私……彼のことが気になって」

「そっかぁ……。オッケ、俺のわかる範囲でなら」

そう言って永坂くんはどんどん彼のことを話してくれた。

大阪から神奈川に転校した後は、七海高校で吹奏楽部を立ち上げ、3年生のときには東関東大会まで出場するような部活へと成長させたこと。今では、神奈川県の七海高校といえば全国大会の常連校になっている。その部の第一世代というわけだ。

大阪にいる頃からも吹奏楽はやっていた。だけれど、部内でいさかいが起きて中学3年生の頃に退部。さらにそれより前、兵庫県西

宮市に住んでいた頃には。
　これには彼も驚かされたそうだ。今の佐野という一家は、彼を養子に迎えたのだという。なぜなら、彼の一家は――。
「阪神淡路大震災で、アイツを残して一家全滅したらしい」
　これでさらに確信は強くなった。間違いない。彼は……。
「佐野くんの旧姓とか、わかる？」
「わかるよ。確か大中（おおなか）って言ってた」
　間違いない。間違いない。
　私の中で沸々と憎悪のような気持ちの悪い感情が煮えたぎってくる。でもダメ。今はまだ早い。そう。もう1週間もすれば、始められる。
「だけど、どうして急にそんないろいろ知りたくなったわけ？　あ、もしかして翔のこと……」
　大丈夫。演技なら私は自信がある。
「うん……」
　ほら、この頬を赤く染めるタイミング。どう？　演技には見えないでしょ？
「……そっか」
　ん？　もしかして不自然だった？
「ちょうど良かった」
「え？」
　私は思わず反応してしまった。
「俺は朝倉さんのこと好きだって、前言ったよな？」
「う、うん」
「お互い、本気出そうぜ。そりゃあこんなの、世間一般で言えば略奪愛みたいな感じかもしんないけど……でも、好きになることに悪いことなんてないじゃん？」
「そうだね……」
　だけど、そう言っている永坂くんの目つき……私も似たようなものかもしれないけど、怖い。

「お互い、悔いのないようにやろうぜ」
「うん」
私たちはこうして約束した。お互いに、頑張ろうと。
もちろん、私の場合は表面上だけど。

私たちの幸せを壊した彼を、追い詰めて追い詰めて……。

だけど、それには陽乃ちゃんが悪いけど、邪魔だ。
彼女は悪くない。できるだけ、辛い思いはさせたくない。なら、永坂くんが彼女を好きだというのを利用させてもらおう。陽乃ちゃんに彼と別れて、永坂くんとでも、この際北原くんでもいい。付き合ってもらえれば、私はそれで満足だ。
さぁ、どう動こうか。
よく考えないと。

軌跡００８　急変する世界

旅行から１週間が経った。新学期が始まってからしばらく経って、授業の日々にもまた慣れてきて、それなりに楽しくやっている４月中旬。桜は散って、葉桜になってきてる。そろそろ半袖で過ごしてもいいんちゃうか、と思うくらい暖かい日だってある。

今日の１限は休講になった。陽乃は授業がある。修治は休講になった分、ちょっと外で用事があるからそれを済ませてくると。隆也は元々、別の講義やから一緒ちゃうし。することも特にないオレは、パソコンルームで休講になった講義の課題（やってへんかった今日の提出分）をするつもり。

パソコンルームのドアを開けた途端やった。

視線を感じた。

その視線を感じたほうを見やると、途端に視線を逸らされた。

気のせい……？

なんか気分悪いなぁ。同じ学部の人ちゃうかった。そもそも、学年も違うっぽいし。なんで違う学年の人に見られなアカンねん。

あっ！　もしかしてオレまたモテてる！？

なーんてな。陽乃に「バッカじゃないの！？」ってしばかれるわ。

そんなどうでもいいことを考えながら、オレはパソコンを立ち上げてパスワードを入力する。いつもこの後、メールをチェックする。

「あ……ねぇ。あの人……」

そういう声が聞こえた。オレが顔を上げると、女子ふたりがパッと顔を背けた。マジでなんなん？　今日。なんか気分悪いなぁ。

メールボックスに入ったと同時に、複数メールを受信する。課題提出確認のメールと……受講確認の最終メール。それから。

誰や、コレ。

知らんアドレス……？
それをクリックしようとした時やった。
「オッス」
隆也が隣に来た。
「おはよーさん。どないしたん？　講義は？」
「休講。マジで萎えるわ」
「ホンマかぁ。ウチも今日、休講やで？　偶然やなぁ」
「だから、ここでちょっとでも課題しようと思ってさ」
そう言うて隆也は教科書とルーズリーフを取り出した。それからメールボックスを開いてオレと同じようにメールを確認する。
「誰だ？　これ」
隆也が声を上げた。オレと同じアドレスから無題のメールが来てる。
「隆也も来てるん？　オレも、オレも」
「翔も？　なぁんか気持ち悪いなぁ」
オレと隆也は顔を合わせた。その表情は二人とも同じ思いを抱いてる表情。

メール、開ける？

はっきり言うて、この時は興味本位やった。件名は「告発」。なんかミステリー小説っぽいやん？　オレはニカッと笑って言うた。
「せーので開けようや」
「だな」
「せーのっ！」
そして、出てきた画面がこれやった。

＞ｉ３６５７９－１５０＜

「な……」

隆也が言葉を失った。
何……これ……。え？　教育学部音楽専攻のＳ・Ｋ？　学籍番号……１０８１４０６６？　オレは震える手で財布を取り出し、学生証を取り出した。
入学直後に撮った、ちょっと初々しい感じのオレの写真の横に、学籍番号がある。その番号は紛れもなく……１０８１４０６６やった。
添付画像がある。クリックして開こうとするけど、手が震えて思うようにいかん。けど、意地でも開いたろ思って開いた。
「これ……去年の学祭の……」
隆也の言うとおり。この画像は……学園祭ルーキーズっていうイベントに半ば強引にオレが引っ張り出された時の、写真……。
目隠しこそしてるけど、あからさまにオレってわかる状態。何しろ、フルネーム「佐野　翔」って書いたフリップを持たされているオレの、フリップの部分が丸見えやねんから。
誰が？
誰がこんなんやったん？　なんで？
人殺しって……なんなん！？
オレは必死になって発信元を探した。誰や！？　誰や、このアドレス！？
「翔！　翔！」
隆也に呼ばれて我に帰った。オレ……もの凄い怖い顔してる。それ以前に。
パソコンルームにおる全員の視線がオレに集中してた。メールボックス開いてる人はみんな……このメールを開いてる。
違う……違う！　オレは人を殺したことなんて……。
――あるやろ？
オレの中の、声が聞こえた。

自分を守ってもらう代わりに、大切な人を――。

「違う……違う！」

気づけばオレは飛び出してた。隆也がオレを呼ぶ声も正直、あんまり耳に入ってなかった。

何が起きたんか。それを一番教えてほしいのは他でもない、オレやった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6207w/

To　Live

2011年12月5日23時54分発行